

子供の造形的創造力の可能性

伊東敏光

研究の背景

自然が創造し続けてきた物質を活用し、我々は今日のような生活を築きあげてきた。

そのなかで、物質は材料とみなされ、人間の意図や目的を形象化する際の媒介物として利用されることが多くなり、我々人間は物質に対する畏怖心や敬虔さをしだいに無くして来てしまった。

造形作品の素材として数多く使われてきた木や石も、加工のしやすさ、耐久性、色合い、触感などの普遍的属性によって価値が決められ、「その木」「その石」が持つ個々の特性については、あまり重要視されなくなってきた。

本研究は、石や木や土などどこにでも落ちている物質に改めて目をむけ、個々の素材が持つ潜在的な可能性を引き出し、それによって新たな造形表現を探り出そうという試みである。

研究には、5歳～12歳の児童30名に参加してもらった。それは、一般社会生活のうえで身に付かざるをえない物質に対する固定化された概念から、子供達のほうが少しでも遠くにいるのではないかと考えたからである。

研究内容

①素材採集

個々の素材のさまざまな特性に目を向けるためには、それが作られた環境を知ることが第一であるという考えから、本研究参加者である子供達と島根県浜田市の海岸に行き素材採集を行った。また当日は地元の方に案内をお願いし、場所の呼び名のいわれ等、地元につながる話や、近年の地震や台風によって地形がどのように変わったのか、体験を通した話をうかがった。

私の方から子供達に話したのは、「とにかく自分が気に入ったものを無作為に拾い集め、実際にものに触れながら作品をイメージして行こう。」ということであった。

当日まで子供達には、制作に関する具体的な話はしていなかった。それは、事前にスケッチなどでイメージを固め、それを作るための材料を探すというプロセスを避けようとしたからであり、素材との偶然な出会いによってイメージを変化させていく柔軟性を大切にしたいからである。

午前中、地殻変動や浸食によって作られた変化に富んだ約2kmの海岸線を移動しながら素材拾いを行った。はじめ子供達はどこから手を付ければいいのかわからず躊躇していたが、一つ二つ拾い、ある目標が生まれると熱中して拾いだす。しばらくするとたいていの子は飽きて集中力を無くすが、移動して環境が変わるとまた拾い始める。約2時間をかけ、石、流木、漂流物、貝殻、砂などを採集した。

昼食後は、地元の方の案内で貝殻が大量にうち上げられている場所に行き貝殻集めをした。その場所には多種類多数の貝殻があり、その多様な色や形に引き付けられたのか、暫くの間はほとんどの子供が黙々と貝拾いを続けていた。

この日、八月二日は猛暑で肉体的にはきつい行程となったが、子供達は付き添った母親や大学生が持ち切れないほど、たくさんものを拾い集めた。また拾い集めるという行為を通じて、この日出会った多くのものが各自の心に刻まれたのではなかろうか。



素材採集



平成6年8月2日 島根県浜田市海岸

②作品制作

制作にあたり重要視した点は、素材集めの時と同じように「ものに触れながら考える。」ということである。そして子供達が「こうしてみたい。」と思ったことについては、研究スタッフ（大学生）と私とで出来る限りの技術提供をすることにした。

作品は一人一点作ることとし、共同制作を避けた。子供個人の主体性を第一とし、制作終了まで作品に対する評価につながるような言葉は出来るだけ使わないよう心がけた。なかなか制作に入れない子には、素材を積み上げたり、並べたり、ともかく手を動かすよう指導した。

はじめ躊躇していた子供達も、きっかけを掴むと大変な集中力で制作する。制作日として二日間取ってあったが、約半数の子は一日目の午前中でほとんど完成させてしまった。その間の子供達の瞬発力と集中力は驚くべきもので、試行錯誤しながらも短時間で結果を出してしまう。一気に作り上げた作品は機知にあふれ、新鮮さと勢いがある。

二日目まで十数人の子が制作を続けた。その内、約半分は一日目の作品のパターンを変え、数を増やし、充実させていく積極的なタイプである。あとの子は、なかなか制作が進まない。技術的な失敗やアクシデントがあり、イメージ通りに作品化出来ずに苦勞している子。求めているものが形にも言葉にもならないらしく、制作作業に入れない子。その他作品はすでに早くから形になっているのに気に入らないのか、壊したり作ったりを繰り返している子等である。二日目終了してもまだ続けたがった子もいたが、全員に作品を提出してもらった。やはり二日目まで残る子は作る事の好きな子が多いのか、一日目よりも落ち着きと緊張感があった。

制作に要した時間は、早い子は約一時間、遅い子は十時間以上掛けたことになる。



作品制作

平成6年8月22・23日 広島市立大学芸術学部アトリエ

③作品展示

「出来るだけ多くの人に実作品を見てもらい、意見を聞きたい。」と言う事から、アジア競技大会期間に合わせ、広島市立大学講義棟エントランスロビーに於て作品展示を行った。

会場には、作品／素材採集及制作時のビデオ映像／感想文／記録写真を展示した。



作品展示

平成6年10月2日～16日

広島市立大学講義棟エントランスロビー

制作を終えて

今回の研究に参加した子供は30名、その全員が作品を提出してくれた。

作品全体に言えることは、貝や石や流木の形や色を上手に生かし造形しているという事であり、その点では「素材の特質を生かす。」という今回の研究課題が、具体的な形として現われた。

素材集めから制作までの過程で特に印象に残ったのは、予想外の「出会い」が作品にいかにか大きな影響を及ぼすかという事である。「だいたいがつけられない」を作った田村修君は、素材集めをはじめればしばらくの間興味を引かれる物がなかったのか、遊んでばかりでいっこうに手が進まなかった。「先生、これでもいい。」一時間ほどして、彼が大きなプラスチック製のうきを抱えてうれしそうに私の所にやってきた。「自然物を集めよう。」という約束ではじめた材料集めであるが、彼の顔を見て駄目とは言えない。一つきっかけを掴むと、他の物にも目が行くらしく、色々な物を集め出した。

彼の場合、その後の制作においても、動物とか人とかの具体的なイメージよりも「大きなうき」の存在が常に中心であり、それに貝を付けたらどうなるか、木を立てたらどうなるかと実際に試し、その中で自分で気に入った組み合わせを見つけるといような制作方法を取っていった。

多くの子は、最初から人とか、車とか、マンガのキャラクターとか、ある程度具体的なイメージを持って材料探しを始めたのではなかろうか。しかし思った形の物が落ちていることはほとんどなく、拾い集めた物で制作するという制約のなかでは、粘土や絵の具で作ったり描いたりするのと違い、自分が拾った物に伴って計画を変化させていくしか方法がないのである。

制作時では「なぞのおやじ」を作った半田海斗君が興味深かった。彼は大量に集めた貝殻を山盛りにして、山全体の形を変えながら造形していった。しかし盛り上げた貝殻はすぐに崩れてしまい作品にならない。相談をうけた私は、ボンドで一つずつ貝を付けていくよう進めたが、面倒なのか言うことを聞かない。しばらく作業をせず遊んでいた彼は、ある方法を思い付いたらしく作業を再開した。プラスチックをガンで溶解して固める方式の接着剤を使って、ネット状に山盛りの貝を包み出した。この方法だと強度はあまりないが、透明な糸状のプラスチックが貝殻とマッチして視覚的にも美しい。遊んでいる間に友達の作業を見て思い付いたらしい。

田村君や半田君だけでなく参加したすべての子供達が、素材や道具との「出会い」から小さな発見をし、それを彼等なりの方法で作品制作に生かしていた。

私達が現実の世界で目的を持って何かをしようとした時、目的以外の事、予想外の事が必ず生じる。多くの場合それは事故であったり、失敗の原因となったりとマイナスの印象が強いが、優れた芸術家はそれを見逃さず、そこによりリアルな現実を見出し、自己の表現の中に取り入れてきた。

メディアによる情報だけで、自己のイメージを変化させることに慣れ、疑似体験による学習方法を身に付けはじめた私達ではあるが、既成の情報に縛られず、実際に物質と触れ合う事で、物質が持つ情報化されていない、また情報化出来ない、無限な要素を引き出すことが出来るはずである。

研究者 芸術学部助手 伊東 敏光

研究協力 芸術学部学生

秋山 隆 菊田ともみ 庄司 強 古川正之 水本裕介 溝手路子
毛利吏絵子 吉田知子 良知美樹 和田拓治郎

参加者 (作品制作者) 広島市立伴小学校三城子供会

田村信子 田村真子 田村 修 折出幸恵 折出敏明 向田大輔
山広真也 伊藤 潤 堀越幸浩 川上達彦 川崎美幸 廣瀬祥子
中西康浩 根石寿之 宮本直幸 宮本幸治 宮本幸枝 半田海斗
新本芳也 氏川智皓 浜本千夏 冨部 綾 増田誠司 高尾希美
龍山 顕 龍山 浄 龍山沙羅 横山明香 上瀬美香 向田みき